

第 514 回友の会講演会 質問と回答

第 514 回友の会講演会（7/3 開催）はオンライン配信限定で開催いたしました。

参加者のみなさまからの質問と講師からの回答を、以下のとおり公開いたします。

(2021/08/01)

■ 質問者 A 様

質問 1

「仏教美術において『世界の本質を示す画題』はどのようなもの」なのでしょうか。

質問 2

「仏教美術をどのように見る（読解する）べき」なのでしょうか。

西洋芸術専攻の方が、「芸術とは、主観的な好き嫌いとは別の客観的普遍性を持つものであり、アイデア（真実在）の再現である。世界の本質の再現と言っても良い。そう思って見ないと作品の真の価値を見抜けない」、とっておられました。

西洋芸術の場合は、プラトン・アリストテレス哲学にキリスト教思想が加わったものを根底として、現在、「美術」と呼ばれるようになった分野ではギリシャ・ローマ神話、聖書の世界の価値観を表現して来ました。具体的に表現される場面は、例えば「東方三博士」とか「受胎告知」などで、聖書に書かれた同じ場面を、多くの画家が繰り返し表現して来ています。そこに「西洋世界の本質」の一つがあるのでしょうか。

私は、東洋芸術、特に仏教美術を論じるときにも「芸術は世界の本質の再現」という考え方で見るのが正鵠を射ているのではないか、とっております。

「仏教では元々は『仏』を図像化することは無かったが、西洋芸術が東進し、ヘレニズム文化となり、仏教と触れた時に、『仏の図像化』が起きた」と、聞いたことがあります。私はその過程で仏教が、「世界の本質の再現」という精神を「換骨奪胎して仏の図像化を試みたに違いない」、だから、仏教美術を論じるときにも「芸術は世界の本質の再現」という考え方で見るのが正鵠を射ているのではないかと考えているのです。仏教美術の「世界の本質」は「仏教を精神基盤とする世界の本質」であることは言うまでもありません。

以上をふまえて、質問いたしました。

<講師回答>

ご質問ありがとうございます。下記は個人的な見解になりますが、ご参考になれば幸いです。

まず、質問2からお答えしたいと思います。仏教美術について、こう見るべき、読解すべきという既定されたものは「ない」と考えています。知識や経験が増えると美術に対する見方は変わるの事実かと思えます。例えば、今回の講演では、三体の如来像が並ぶと過去・現在・未来をあらわす三世仏、七体の如来像が並ぶと過去七仏をあらわすという例を紹介しました。これは、知識を持つことで如来の数を根拠に、どういう題材でつくられたかを解釈した事例です。しかし、それは当該美術が有する一側面を理解したにすぎず、

当該美術が有するすべての情報を理解できているわけではありません。場合によっては、知識が邪魔をして誤った理解をしてしまうこともあるかもしれません。

仏教美術は、表面にあらわれている形、つくられた背景や意図、形をつくり出す材料や技法、美術が経てきた歴史が物語るものなど、さまざまな情報を備えています。その中には、言葉としてうまく整理できないものもあるかもしれません。美術には、頭だけで理解できる情報だけではなく、観る側が感じる、言葉で分別することのできない情報も多分に含まれていると考えています。時には、作り手が意図したものと異なる理解や感じ方が生じるかもしれませんが、それもまた美術が有する価値の一側面だと思います。それぞれの興味のある視点・観点で、考え、感じるのが、仏教美術を楽しむお勧めの鑑賞方法です。

ここから質問1にお答えしたいと思います。美術を研究する者の役割は、美術が有する情報の一端を客観的に示せるように調査し、整理することだと考えています。西洋芸術専攻の方がおっしゃっていた「世界の本質の再現」というのも、そういった作業の結果見えてきた成果のひとつなのだと思います。ただし、美術作品の価値は、ある特定の成果や情報に限る一元的なものではなく、多様なものだと考えています。仏教美術における「世界の本質を示す画題」は特定できない、というのが私の考えです。

私が研究対象にしている石窟寺院は、さまざまな目的によって造営されています。出家僧が修行を目的とする空間もあれば、在家の人々が供養を目的とする空間もあります。また、皇帝など時の権力者によって権力や財力を誇示することを目的に造営されたものもあります。石窟寺院の空間を構成する美術は、ある目的に合わせて設計され、造形されたものであり、人びとの世界観や信仰、思いなどがあらわされています。つくられた場所や時間にはある程度は依存しますが、使い続けられること、伝播・伝承されることで、時空間を超えて情報が付加されることもあります。仏教美術が備える価値のひとつは、時空間を超えて人間という存在の本質を伝えていることなのかもしれません。

石窟寺院の美術は、洞窟の空間と関連の関係にあり、それぞれの美術を単体としてではなく、空間を構成する一要素として捉えて解釈することで、より深い理解ができるのではないかと考えています。もしかしたらそこから本質の一端が見えてくるかもしれません。空間全体を捉えるには、実際に洞窟に入り、体験を伴う調査が必須となりますが、今は現地に行けずもどかしさも感じます。この状況が落ち着いた際に現地で考え、感じられるよう、国内のお寺や博物館にて仏教美術の実物を鑑賞し、新たな視点・観点を養っていきたいと思っています。

以上、ご質問いただきました内容と若干ずれてしまいましたが、私見を述べさせていただきました。この状況が落ち着きましたら、ぜひ現地に足をお運びいただき、実物の鑑賞をお楽しみいただければと思います。